

# さけと古環境

## さけかわと地名考



歴史深い北越後に平成20年4月1日誕生した新生村上市は、山地森林において日本の縮小版に相当する版図面積を有し、この豊穡の大地を太古から変わらぬ生態系で湛えています。この機会に遥かにしえの原風景に郷土の想いを巡らせ、その悠久の生活環境を共有することでより結びつきの強い独自性を持ち続けることができると思います。

### 新生村上市の各地域の古環境考

この地で生活していた太古人は2万年前に遡る後期旧石器時代の遺跡などから連綿と続く生活の足跡を、有用な地形形態から導かれる地名の伝承として刻み継承してくれています。この伝承考古学ともいえる発掘に必要な道具は他でもない先住民のアイヌ語に残されています。もちろん古東アジア語ともいえる語体ですので、その片鱗を現在のものから選び抜いて近隣の古朝鮮語をも参照しながら綾解いてみたいと思います。技巧を要しなくとも鮮やかに蘇る原風景に驚かされる思いがします。

#### 山北地区

山北	サン・チュブ・ボク	海に開けた・日のしもて
三内	サン・ナイ	海に開けた・川
勝木	ガツ <sup>朝</sup> ・キナ	マコモ・草
寒川	クウンイ・ガッパ	我ら住む・川
女川	オクウンイ・ガッパ	我ら住む・川
(浜)新保	シン・ボロ	川・大きな
札幌	サツ・ボロ	乾いた・川
大毎	オオク・ウォル・トゥ	深い・飲む水・沼
板貝	イト・トゥ・ガッパ	岬・沼・川

#### <古アイヌ語と確認できる表音イメージ>

[川、沼(湖)、海]	ベツ、ナイ、シン、トゥ、ツウ、ガッパ
[水、湿地]	アクア、アッカ、ワッカ、ウォル、サル、ニタツ
[泉、飲む水]	スンズ、ク・ウォル
[浜]	ウタ、オタ、ヌタ、ムイ
[岸、陸]	ヤツ、ヤト、パツ、サバツ、リイ、ム、ナ
[谷、大地]	タン、[岬] イト、[崖]ピラ
[頭(先頭)、鼻、尻(後ろ)、喉(出口)]	サバ、エ、オ、ノツ
[船、舟]	フィナ、フィラ、チブリ

#### <古朝鮮語と確認できる表音イメージ>

[川]	ゲン、ガン、ガッパ
-----	-----------

参照：『日本の地名散歩』大友幸男著、三一書房1997

日常生活と居住高度確保の必然性から、水辺に寄り添う姿が想い浮かびます。

#### 朝日地区

三面	ムイ・オ・モム・トゥ	浜・尻・流れる・川
三内	サン・ナイ	海に開けた・川
薄萄	ブツ・トゥ	支流が本流に出会うところの・川
古渡路	ブツ・トゥ・ル	支流が本流に出会うところの・川・路
小須戸	ク・ウォル・スンズ・トゥ	飲む水・泉・川
猿沢	サル・サバ	低湿地・頭
猿田	サル・ウタ	低湿地・浜
岩沢	イウォル・サバ	漁獵・頭
鳴海	ナリ <sup>朝</sup> ・ムイ	金・浜

#### 薄萄川+明神川

古アイヌ語の表音言語が奈良・平安時代に漢字表記に写し換えられても、なおその本意を失わない日本文化の精細性にも驚愕させられます。



鮭文化を育む自然背景の中で、大自然の形成根源ともいえる山岳地形や森林帯、河川水脈の恵みが最も備わった環境のひとつと数えられる地がここ北越後にあるといえます。

山、森、川、海が揃っているだけに留まらずその活性力の高さにおいて特選を誇りつつも、気品高い奇跡ともいえるバランスでそこにひっそりと佇んでいる姿を私たちは毎日眺めているのです。



#### 三面川

#### 村上地区

馬下	マウ・ラ・シッポ	風の・下・塩
間島	マウ・シン・モム	風の・川・流れる
瀬波	シマム・ムイ	西の・浜
日下	チュブ・カ	日の・かみて
坪根	チュブ・ボク・ナイ	日の・しもて・川
都岐沙羅	トゥ・キサラ	海(湖)の・耳型の
木更津	キサラ・トゥ	耳型の・海の
柏尾	ク・ウォル・シン・オ	飲む水・川・尻
下渡	ガン <sup>朝</sup> ・トゥ	川・湖

#### 荒川

#### 神林地区

助淵	スケ・ベツ・チェブ	鮭の・川・魚
神納	ガン <sup>朝</sup> ・ノツ	川・のど
桃川	モム・モム・ガッパ	急流・川
石川	イト・スンズ・ガッパ	岬・泉・川
牛屋	ウサ・ヤブ	入江(湾)の浜・岸
平林	ピラ・パツ・ヤチ	崖・岸湿地
塩谷	シン・オ・ヤト	川・尻・岸

#### 荒川地区

海老江	エエン・ピシ・エ	尖った・浜・鼻
金屋	ク・ウォル・ナ・ヤブ	飲む水・川・岸
藤澤	ブツ・シン・サバツ	支流が本流に出会うところの・頭
鳥屋	トゥ・リイ・ヤブ	深い・高い・岸
荒川	アトウイ・ラ・ガッパ	海・下(る)・川

